

2024年4月5日・6日のグラウンドワーク三島・視察研修体験を終えて
早稲田大学 佐々木葉

記憶力がないくせにまめにメモを残すこともしない自身を反省することがまたしても。渡辺豊博さんと最初にお会いしたのがいつなのか、わからないのだ。いわんや初源兵衛川訪問の時期も。それが20年以上前であることは確かだ。「源兵衛川・暮らしの水辺」は2004年度土木学会デザイン賞最優秀賞となり、その講評を私が書いている。しかもその書き振りは2004年時点ですでにこの川の価値を知っているものとして。

<https://www.jsce.or.jp/committee/lsd/prize/2004/works/2004g2.html>

その後もふらりと立ち寄るなどして、源兵衛川は知っているつもりでいた。しかしそれは大間違いであることを痛感した。特にグラウンドワーク三島の仕事ぶりについて。



源兵衛川だけじゃない

なんとなく「グラウンドワーク三島イコール源兵衛川」と思っている人が多いのではないか。私もそうだった。ひょんなご縁で昨年秋から研究室の修士の学生が三島に住み込みでグラウンドワーク三島の仕事をすることになり、彼が現地で何をやっているかの報告を受け、対象地がこんなに広がっているのか、と思いはした。しかしその広がりというのは、現地を周り、かつ体験すること、そこの風景と向き合うことで、初めてじーんときた。空間、時間、活動、作業の広がり蓄積、すなわちエネルギーの果てしなさの体感。

活動のリストとしてウェブサイトにもリストアップされている項目は、源兵衛川・中郷温水池・松毛川・境川清住緑地・ほたるの里・三島梅花藻の里・雷井戸・鏡池ミニ公園・腰切不

動尊・窪の湧水・みどり野ふれあいの園・鎧坂ミニ公園・学校ビオトープ・自然観察会・せせらぎシニア元気工房・そばつくり隊・三島街中カフェ・三島門前屋台村の18件（終了済み含む）。この他に被災地支援としては東日本大震災、熊本地震、ネパール大震災そして能登地震での迅速な活動、さらに地元三島の開発計画への問題提起もある。渡辺さんと話をしたことがある人なら納得できる、「あの」実行力とそれを支える論理が次々と形になっている。



環境をつくる、ということ

さて、今回ご案内いただき、作業にも混ぜていただいたのは、順番にあげると、境川・清住緑地と、ベテランガイドさんによる源兵衛川から三島梅花藻の里・雷井戸・腰切不動尊を含むツアー、そして大場里山のビオトープ草刈りと松毛川での植樹。加えて事務所でのミーティングという名の渡辺さんの独演会と、次々と素敵な方が呼び寄せられる交流会。加えて隣接する清水町出身の卒業生の参加を得ての柿田川遊水池訪問と彼の実家の定食屋桐屋さんでのとびきりのランチというオプションメニューが加わった。これら全てを語りたいところだが、ここではやはり本命の、グラウンドワーク三島の「ミッション・アクション・パッション」によって生成されている環境の風景について考えたことを忘れないよう、書き留めておく。それは、「見過ごしてしまったら失われてしまう、あるいは決して生成されない環境のかけがえのなさを直覚し、タイミングを逃さず動き出し、時間をかけて粘り強くちゃんと見える風景に育てていく仕事」、だと思う。さらに言えば、直覚する時、渡辺さんのなかに、風景が生まれている、ということ。

境川・清住緑地

今回の視察体験はグラウンドワーク三島のスタッフとなって10年という美和さんがお付き合くださった。そのアシスタントして研究室の学生が走る。最初におとずれた境川・清住緑地は、まさに地形的、水環境的、水インフラ的に地域のツボである谷地の湧水地のランドスケープデザインを考えるに格好の場所であった。近世より地領の界をなしている境川は現在も三島市と清水町の行政界となっている。その線は過去の河道に習い公園としてひとまとまりに見える範囲の内に存在している。洪水対策の遊水池としての論理にもとづき水のための空間を確保して、そこにトンボを象徴生き物とした環境整備をするという計画物語を立て、公共事業としての整備を進めていったエリアである。養鱒場としての機能が消失したタイミングとそれを放置しておけば水環境の地域のツボとはかけ離れた土地利用に転換してしまう事態へ待ったをかけ、粘り強く条件を整え、その上に湧水の里としての地域のツボを象徴的に語るランドスケープ整備を実現させている。2000年から始まった整備の中で上書きされていった風景の痕跡は、目をこらすと見えてくる。そしてその上書きのデザインの技量も。上流側の有機的なランドスケープデザインに比べて、下流側、さらに行政界ごとに辿々しくなるデザインは目に痛い。しかし、気長に待とう。そのすぐ下流の現役の溜池もやがていつか機能転換が求められる時が来るかもしれない。あるいは、この豊富な湧水の価値と意義が劇的に変わる時代が来るかもしれない。その時にもつながっていく環境の初期値として決定的に大切な風景は守られている。



大場里山エリア

二日目の午前中におとずれたのは大場里山エリアである。グラウンドワーク三島の事務所からは車で約6km、20分ほどかかる位置にある。箱根から伊豆半島に続く尾根が三島の平地にタッチする先端にある。しかしその裾野の前面を伊豆縦貫道/東駿河環状道路が貫いていく。高架構造とはいえ、里山と平地、その先の街の境界に挿入されるこの構造物は、マクロな環境の有機的繋がりを物理的にも視覚的にも切断する。その道路の足もとに作られる水路は、東側の里山から流れ出る豊富な水とともに生き物たちが棲息できる形にすることが地域とグラウンドワーク三島から提案された。整備は道路事業者である国が行ったものの、その管理をしているのはグラウンドワーク三島のメンバーだ。ということでこの日は水路周辺の草刈りを実施した。道路沿いの側溝の掃除やゴミ拾いも。ペットボトル、空き缶に加えて壊れた掃除機まで捨ててあった。気候が気持ちよく、作業はそれほどしんどくはないが、これから夏にむけ草が伸びる時期の作業の大変さを美和さんに指摘され、改めて想像した。実のところこのビオトープと水路は土が悪いのかあまり生き物は来てくれていない。しかし、ここにこれがあることの意味は実に大きい。道路に背を向けて眺める里山のなんと美しいことか。グラウンドワーク三島はこの里山自体の管理も行なっている。祠も抱えた里山の眺め、里山からの眺めは、なにとなくなが繋がっていないといけませんよ、ということをお忘れな、思い出す、気づく、想う機会そのものである。



松毛川という環境ユニット

二日目の午後は大場の里山から西方向へ約 4km 移動し、南から北へ流れる狩野川を境に沼津市となる場所にある松毛川のサイトである。狩野川の旧河道で、昭和初期の堤防整備後に止水域として三日月型に残った水面を縁取るように緑地があり、その周囲には農地が広がる。この緑地を切って農道を整備する工事が動き出す直前に待ったをかけ、農道の位置をずらして線状の緑地を残すことをグラウンドワーク三島の働きかけと自らの土地購入で実現した。失われたら二度と戻せない環境の価値を直覚し、不可分なまとまりとしての環境保全のために行動した結果である。しかし、そのかけがえのない価値は、そのときに実は存在してはいない。水辺を縁取る緑地は人の手が入らないことによって竹林と化し、森とは言えない状態になっていた。潜在的な価値に対して起こしたアクション。それを実現するために文字通り汗を流す作業が続く。今日までに竹類の伐採と抜根が終わり、あるべき樹種の植栽が進んでいる。そのほんの一翼として 4 月 6 日には 7 種類 20 本ずつ計 140 本の苗木を植えた。予想以上にしんどい作業だった。穴をほって苗木を植え、添木を立てるだけなのに。学生 6 名もかなりきつかった様子だ。美和さんの他にグラウンドワーク三島のボランティア常連の方お二人は、淡々と平然と作業を続ける。声を出さないとやっていられなくなった私が、ほい、とか、ヨイショとか、ちゃんと育ててねとか、一人喧しくしていた。なんとか作業終了。最後の感想交換のなかで、ズバリ聞いてみた。美和さんがこれを続けるモチベーションはなんですか、と。お返事は、もともとこういう作業は好きだし、やれば成果が見える、草を刈れば綺麗になる、木を植えれば育つ、と。このやりとりの後、これまでのプロセスが見える場所を回った。ここが今年、これが去年、これが 5 年目くらい。向こう側にみえるのはマイナスの初期値として竹林が残る部分。定点観測写真のように苗木を植えたときからの時間経過が風景に現れている。美和さんのいう成果とは数週間、半年、1 年、数年、10 年、そして数十年のタイムスパンごとそれぞれあるのだと思い至る。成果の見える化だの KPI などという言葉をいつの間にか自分でも使うようになっていたが、その軽薄さに恥じる。淡々と、気長に、まめに。その作業の中でしか見えない風景があると改めて考えた。一方グラウンドワーク三島はまめに現地に看板を立てる。これはなにか、何をしているのかを説明する。このことの対外的対内的大切さも考えさせられた。膨大なパンフレット類や報道へのリーチも含めて、ひとつひとつ、一步一步を言葉に記録にすることが、長い長い道のりを歩むために必要なのだ。



源兵衛川再生の始まりの風景

最後に、今回最も「そうだったのかぁ」、と感じ入った話。交流会の場で渡辺さんに、そもそも源兵衛川を綺麗にしようという声を上げたのは誰なんですか、と聞くと、それは渡辺さん自身だった。かつての綺麗な源兵衛川を体験もしていながら、大人になってガンガン仕事をしている渡辺さんは、すぐ近くにある源兵衛川の変化に全く気付いていなかった。ところがある夜、梯子酒の途中か仕舞かに源兵衛川を渡ったとき、月明かりのもとに浮かびかかった源兵衛川が目に入ってきた。白いゴミ袋が生首のように点在している。翌朝再び訪れ、川面を覗き込んだときに襲ってきた臭気。これが源兵衛川再生の契機となる風景との邂逅であった。すぐ近くに待ったなしのアクションの引き金となるような眺めがあったのに、それに渡辺さんは出会っていなかった。私にこの話をしているときの渡辺さんには、月明かりに浮かぶ生首も、襲ってきた臭気も、ついさっきのことのようリアルに感じられているはずだ。こうした体感直感的にあるパッションに火をつけ、アクションのなかでミッションを支える論理と戦略が立てられる。グラウンドワーク三島の活動の引き金は、風景との邂逅にあるのか、と妙に、勝手に、納得したのである。思えば、切れ目なく延々と語る渡辺さんの話は、常に実況中継のようにリアルだ。私はいつも勝手にその場面を思い描きながら聞いている。時空間が飛躍するその語りにもあまり当惑せず聞くことができるのは、場面転換が頻繁で唐突でも、各場面がリアルだからかもしれない。渡辺さんと一緒に活動が続ける人たちは、渡辺さんが見ている、いまここではまだ見えない風景（普通に言えばヴィジョン、あるいは絶対回避しなければならない事態）があることに共感し、それぞれ自分の眼差しでの風景を描きながらスコップを振っているのかもしれない。

そんなことを考えることができた二日間の視察研修体験でした。どうもありがとうございました。風呂に入ってから帰るといふ学生たちと別れて、一人帰りの電車のなかでどうしようと缶ビールを飲みました。

